

『いはでしのぶ』の前齋院考

勝 亦 志 織

「キーワード ①齋院 ②皇女 ③密通 ④ゆかり ⑤中世王朝物語」

はじめに

一、齋院概略^{注2}

平安時代から鎌倉時代に至るまで、多くの物語が作られ、それらの物語には、齋宮や齋院といった存在が登場してくる。例えば『源氏物語』では、齋宮であった秋好中宮、齋院であった朝顔の姫君などは、物語の重要な姫宮として登場する。しかし、一方で中世王朝物語になると、齋宮や齋院が登場する作品は少なくなり、また物語において主要な役割を持たなく^{注1}なる。そうした物語史の変遷は、以前、拙稿で論じたことがあるが、それをふまえ、本稿では中世王朝物語の一作品である『いはでしのぶ』の前齋院について論じていきたい。物語史の中では密通される齋宮が多いのにもかかわらず、『いはでしのぶ』の前齋院は例外的に密通され、その結果子供まで生むことになる。なぜ、密通の相手として齋院が選ばれたのか、またそれが物語の中でどのような意味をもつのか考察していきたいと思う。

齋院とは、賀茂大神に仕える齋内親王^{いづみ}である。弘仁元年（八一〇）、嵯峨天皇が平城上皇との対立克服を賀茂大神に祈願し冥助を得たため、皇女有智子内親王を遣わしたことに始まると伝えられている^{注3}。数度の断絶をはさみ、土御門天皇代礼子内親王まで三十五人の齋院が卜定されている。

そのような齋院が物語の中に最初に描かれるのは、『大和物語』の君子内親王であろう。父、宇多帝との贈答が物語の中に描かれている。しかし、作り物語の中に齋院が登場するのは『源氏物語』が最初である。『源氏物語』の齋院は、桐壺帝の女三宮（弘徽殿腹）、朝顔の姫君、末摘花の乳母子侍従が行き来していた齋院、今上帝代の齋院の四人が確認できる。ただし、物語の中で重要な位置を占めるのは、朝顔の姫君だけである。

齋院は御服にておりぬたまひにきかし。大臣、例の思しそめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。宮わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。
〔朝顔〕巻②四六九頁^{注4}

このように、朝顔の姫君に対する源氏の求愛は齋院退下後も続く。しかし、それを拒み通し、「若菜」下巻では出家し仏道に専念している様が述べられる。この不婚を通す姿こそ、この後の物語の齋院像に影響を与えているのであるが、朝顔の姫君について、もう一つ重要な点があり、高い文化を保持していることである。明石の姫君入内の際に、香の調合に対しては「齋院の御黒方、さいへども、心にくく静やかなる匂ひことなり。」
〔梅枝〕巻③四〇九頁と、手蹟に關しては「かの君と、前齋院と、ここにこそは書きたまはめ」〔梅枝〕巻③四一六頁^{注5}と、その素晴しさが述べられている。この「不婚」と「高い文化をもつこと」は物語の齋院にとって重要な要件となる。

次に、齋院の役割の重要さで考えると、物語史の中で『狭衣物語』こそ一番の存在であろう。登場する姫君たちのほとんどが齋院（あるいは齋宮）経験者であり、狭衣にとって最も愛する女性、源氏宮も齋院となる。源氏宮は齋院に卜定されることで狭衣とは結ばれず、また、琴の名手とあり、文化の高さが見える。ここにも不婚と高い文化を保持していることが示されているのである。もう一人、狭衣をめぐる重要な前齋院は一条

院一品宮である。一条院一品宮は様々な役割を持つが、三十歳を過ぎた年齢や年かさの容貌が特に強調されており、「不婚」のイメージがもたらす「さだ過ぎた女」として造型されている。加えて、狭衣の実子である飛鳥井の姫君の養育者という側面も大きい。「一品宮」であつた一条院一品宮が養育していたからこそ、飛鳥井の姫君は狭衣即位の後に「一品宮」となれるのであろう。このように、二人の対照的な齋院が『狭衣物語』に描かれるわけであるが、それは、成立の背後にある齋院禊子内親王家という齋院文化圏の中の様相が影響してもいるのだらう。一方で史実の大齋院選子内親王の影響を受けた作品もある。

例えば、『海人の刈藻』では、賀茂祭において齋院が若宮に和歌を贈る。

齋院は当代・一条院などの御はらから、女四の宮にておはしますに、御棧敷より、殿、二の宮抱き奉らせ給ひてさし出で給へるに、御輿のうちより、御扇に葵をうち置かせ給ひて差し出でさせ給へる、兵衛佐賜はりて殿に奉るを見給へば、

暗からん神代のことも忘れられてあふひの光見るぞ嬉しき

御手は殊にけだかく、上衆めかしき御書きさまなり。(三頁)^{注7}

この描写は『大鏡』や『栄花物語』に描かれる選子内親王と藤

原道長・敦成親王らの描写とはほぼ同様である。『栄花物語』の描写を次にあげておく。

四月には、殿、一条の棧敷にて若宮に物御覽せさせたまふ。いみじうふくらかに白う愛敬づき、うつくしうおはしますを、齋院の渡らせたまふをり、大殿、これはいかごとて、若宮を抱きたてまつりたまひて、御簾をかかげさせたまへれば、齋院の御輿の帷より、御扇をさし出でさせたまへるは、見たてまつらせたまふなるべし。かくて暮れぬれば、またの日、齋院より、

光いづるあふひのかげを見てしかば年経にけるもうれしかりけり

御返し、殿の御前、

もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらん

とぞ、聞えさせたまひける。(巻第八「はつはな」①四五六〜四五七頁)

もちろん、若干の相違はあるが齋院の和歌は類似しており、この選子内親王の逸話が物語に与えた影響は大きい。

また、一方で『堤中納言物語』の「はなだの女御」では、齋院を「五葉」に喩えている。

尼君、「齋院、五葉と聞え侍らむ。かわらせ給はざんめれ

ばよ。つみを離れむとて、かかろさまにて、久しくこそなりにけれ」との給へば、「はなだの女御」四七五頁)

この「五葉」に喩えられ、その理由が「かわらせ給はざんめればよ」ということも、選子内親王の影響であるう。選子内親王は五代五十七年の長きにわたって交代しなかった。長く齋院として仕えたために、未婚のまま年を重ねる皇女の姿がここにはある。また、同時に選子内親王をはじめとする齋院は都の中にあるがために、文化サロンを形成した。齋院文化圏が和歌や物語といった文化を奨励していたことはすでに論じられているが、そうしたイメージもまた物語に影響を与えないはずはない。

物語が齋院を描くとき、それは不婚・文化・老齡・養育といった意味性を付与していることが以上のことから言えるであろう。これらをふまえて『いはでしのぶ』の前齋院を考えるとどうなるであろうか。次節以降考察していきたい。

二、密通と死―伏見姉妹との対比から

『いはでしのぶ』の前齋院は、物語前半の男主人公、一条院内大臣の異腹の姉である。一条院の後腹の姫宮であり、嵯峨帝代の齋院であったことがわかる。母後の死後、伏見に遁世した兄式部卿宮のもとに身を寄せ、母に代わり式部卿宮の二人の姫君(大君と中の君)の後見役になる。前齋院の登場は、次のように齋院を退下した後に、式部卿宮のもとを訪れた一条院内大臣と対面する場面からである。

ちの母となるのである。

母后も、をなじふもとに、姫君たちをあはれにおぼしはぐくみて住ませたまひし、ごぞの秋うせたまひにししかば、御妹の齋院もおりさせたまひて、やがてむかしの御かはりに、三所ぞ住ませたまひける。(中略) いたくおびれ、若く、たをたをとをかしげに見へたまふもことわりの御よはひの程なりかし。これぞ、この大臣(一条院内大臣)をなちきこゑては、なかのおとにおはしければ、廿五ばかりにならせたまふも、御年の程よりは、あへかに心苦しげにぞおはします。中宮(内大臣妹)は、くもりもなく、けだかきさまにて、はづかしう、わづらはしげに見へたまふぞかし。されど、いづれも、いまま少しのへだてありともおもはば、これはなほなつかしきかたの、すぐしがたくおぼえまし。(巻一 二八〇頁)^{注12}

引用文にあるように、前齋院の描写は二十五歳という年齢を表記しながらも、その若々しく、あやかに美しい様を描き出している。兄弟である一条院内大臣の視点からも「これはなほなつかしきかたの、すぐしがたくおぼえまし。」と見られているほどである。この描写こそ後の密通への伏線でもあるのだが、しかし、式部卿宮の姫君二人と、この前齋院が伏見にともにいることが大きな問題といえよう。齋院を含め、伏見の里に住む女三人の行く末は、三人がともにいはずのぶの中將^{注13}によって密通され、その子供を生む。つまり、次代の物語を担う人物た

物語はこの後、式部卿宮の強い希望により一条院内大臣が大君と結婚する。しかし、紆余曲折の果て、大君は嵯峨帝の尚侍となりつつも、いはずのぶの中將に密通され女子を生む。何も知らない嵯峨帝は生れてきた子供を自分の子と信じており、大君を愛し続け、皇后宮の位を授けるのである。この大君と前齋院のかかわりは現存する物語の中ではあまりない。式部卿宮の死後、大君が一条院内大臣によって京に迎え取られる折に、後見役として登場する程度である。一方、中の君といはずのぶの中將から明確に対比関係におかれることとなる。中の君はいはずのぶの中將と結婚し、対の上として待遇されることになるが、そこには前齋院といはずのぶの中將との関係が裏側にある。では、この二人はどのように対比されているのだろうか。^{注14}

いはずのぶの中將が中の君と初めて契りを結んだ場面では、前齋院は「齋院をはじめたてまつりて、あぢきなく心をくだきたまふに、夜中近くなる程に入りおほしけり」(冷泉家本 Aウ)と、中の君の後見役として振舞う姿が見られ、その後も妊娠した中の君を気遣い、「心苦しき御さまを、同じくは京などへ迎へたてまつりたまへかし、我はさて年ごろの本意をもとげて、まぎれなくおこなぬをもしてあらんかし、など思しけり」(冷泉家本 EオウEウ)と、いはずのぶの中將に中の君を京に迎え取ることを訴えてもいる。しかし、この会話から物語は反転する。中の君のもとを訪れているはずのいはずのぶの

中将の視点から、齋院は以下のように捉えられるのだ。

あながちよしばむべき御程ならねば、時々は物越しにて御いらへほのぼのきこえたまふ折もあるに、何事とあらまほしく奥ふかきものから、なまめかしくもある気色を、ことのほかに御心とまりて、おほかたの御心よせことにきこえたまひつつ、いかで御かたち見てしがなと思しわたりけり。
(冷泉家本 Eウ)

このように、中将の前齋院への思慕が語られ、おそらくあまり間を開けず、前齋院のもとに中将が忍び入ることになる。

さて人しづまりぬるほどに、やはら御そばにそいふしたまふに、おもひもよらず、御らんじあげたるに、男のかげなれば、あさましともなのめならで、おきあがりすべりのかんとし給ふに、

つらきかな身にしむことのねをそへてしのぶる袖につゆをもらせよ

よろづにこしらへなくぐさめ給ひつつ、いかでかまこととおおぼさん。「心うしとも世のつねのことをこそいへ。かかる憂き宿世やはあるべき。これはなほ夢か」とのみくれまどい給へるに、ゑんにめでたきけわいの御耳にきこゆるも、憂しとよりは他に覚えたまはず。(中略) やうやう暁近きけしきなれば、出でたまひても、むなしくのみ待ち

明したまふらんかたつかたの心中も、いといとをしようおほしやらるる。「思ひつるより、なをなをとなつかしくもおはしつるかな」と、夢のうきはしとだへてやむべき事は、くちをしく恋しかるべき心地なり。(巻四 五二一〜五二二頁)

前齋院にとって、いほでしのぶの中将がこのように忍び入ってくることは、まさしく「夢」かと惑う出来事であっただろう。この場面の直前が散逸しているため、詳しいことはわからないが、しかし、「身にしむことのね」とあるように、前齋院はその夜に琴を弾き、その音がいほでしのぶの中将が忍び入る契機となったと考えられる。また、かつて一条院内大臣から「なほなつかしきかたの、すぐしがたくおぼゑまし。」とされていた前齋院は、それと対応するかのように「なをなをとなつかしくもおはしつるかな」と思われている。すでに二十八歳となっている前齋院に対して、このような表現をすることが奇異に思われるほどである。そして、注意したいことは「かたつかたの心中」を思いやるいほでしのぶの中将の心情である。この「かたつかた」こそ中の君その人であり、引用場面の続きでは中将は前齋院と中の君の双方に文を贈っており、同じように、二人に同時に文を贈る次のような場面もある。

また、かの音羽山おとにのみあらぬ心の中、いかにくまなう、世づかず聞きたまふらんと、思ひ出でたまふには、ま

たさすがにけぢかき御なかはかこち所ある心地して、

「別れかね草のゆかりをたづねつつ浅き露にも濡るる袖かな

一もとゆへとばかり思ひ侍るもあはれならずや。」など、こまやかなるに、ことには、

「さまざまにわけける草のゆかりにもうきにかことの露を散らすな

とこ山なり。」と、くちかためたまへるもにくからず、をかしと見たまふ。(巻四 五二五〜五二八頁)

これは前齋院とも関係が生じたことを中の君が知った後の、いはでしのぶの中將の対応である。前齋院と中の君を「草のゆかり」と捉え、中の君には言い分けを、前齋院には口止めをする。このような態度こそ、今後の姫君たちに対する態度を象徴的に表している。この後、中の君は伏見で男子を出産し、若君ともども京を迎えられ対の上として待遇されていき、一方前齋院は、中の君出京後も伏見に残り、中の君と同じように男子を出産するも、浮名が立つのを恐れその子を手放し死去する。一方は妻の一人として待遇され、一方はひたすら隠し置かれる存在となるのである。

物語は前齋院と伏見中の君を対照的に描きながら、それを後半部においても再生産する。それは前齋院腹の若君と、伏見中の君腹の若君の問題である。前齋院腹の若君は、生誕時から「対に物したまふよりも、我御鏡の影もおぼえたる心地して」

(巻四 五三九頁)と、伏見中の君腹の若君よりも愛情が優っているように描かれていくが、それは、前齋院の死後、明確に表現される。

入道の宮の御かたにて、わか君見聞こえたまへば、何の憂き身やらん、ともしらず心地よげにうち笑ひて、日頃にことのほかにおよずけになる顔つきのらうたさ、かの千代のはつ花とて泣きたまへりし面影など、いまさらだにえがたきまで思ひいでらるるに、(中略)げにかの対の君の御腹のよりも気高く今よりなまめかしきさましたまひて、生ひ出でたまふままにいとつうくしう御本性などもしめやかに思ひ入れ高きさまにものしたまふを、おとどもすぐれてあはれに見たまふに、涙ぐましうぞ思ひ聞こえたまふ。(冷泉家本 四〇〜五〇)

中の君腹の若君よりも、前齋院腹の若君の方がはるかに優れた資質を備えていることを、わずか生後数ヶ月の幼児に対して述べるのである。それは少年に成長した後も変わらず、白河院の六十賀の場面でも同じである。

中にもかの忘れ形見の君はなまめかしうらうたげにて、したまふ技なども今少し心有る様に見えたまふを、涙ぐましうあはれにぞ見きこえたまふ。(冷泉家本 二二一ウ)

兄弟二人で舞った舞を見た、父、いほでしの中將の感慨である。この後、二人揃って元服するが、伏見中の君腹の若君の方が数ヶ月先に生まれているため兄の扱いで中將に、前齋院腹の若君は少將になる。それに対していほでしの中將は「父大臣はあかずおぼされけり」（巻四 頁五六八）と、やはり、前齋院腹の若君により愛情が優れていることがわかる。これがやがて、前齋院腹の若君が主人公格になることの所以であり、また母である前齋院の死後、一品宮のもとで養育されたという付加価値が問題となっているのである。

三、「ゆかり」としての存在

前述したように、前齋院は伏見中の君と「草のゆかり」とされる。二人の間にはれっきとした位相差が認められるのに、「ゆかり」とされるその理由は何なのだろうか。伏見大君は、一品宮の「ゆかり」であった。この物語では一品宮という女性の存在価値は大きく、その一品宮の「ゆかり」であることが一条院内大臣や嵯峨帝の心を動かした原因でもあった。そして、その論理は当然いほでしの中將も束縛する。本文中に描写はないが、いほでしの中將が伏見中の君、前齋院と関係を持つようになったのも、「ゆかり」が問題であることは間違いないだろう。つまり、伏見大君―伏見中の君―前齋院と、「ゆかり」によってつながっているのである。そして、その先にはいほでしの中將が恋焦がれる一品宮と一条院内大臣の姿が見える。

一条院内大臣にとっては、伏見大君は確かに一品宮のゆかりであった。だが、一品宮を失ってからは、ひたすら一品宮思慕に明け暮れる。物語が、伏見大君の問題を横に置いたまま、悲嘆に暮れる一条院内大臣を丹念に描き出していくのは、彼にとっては一品宮そのものが重要であったからで、一品宮を失っては「ゆかり」は何の意味も持たなくなること示すのである。だが、いほでしの中將にとってみると、最初から手に入らない一品宮を思いつづけるからこそ、「ゆかり」が必要なのではないだろうか。手に入らない女性の代わりとして、彼はその「ゆかり」を求めていく。伏見大君・伏見中の君・前齋院と、彼が遍歴を続けるのは、ひたすら一品宮の「ゆかり」をたどっていることになる。そのような中で彼は、念願の一品宮と違うところの無い二品宮（一品宮と一条院内大臣の娘）を手に入れることで充足し、その遍歴を止める。そして、ここにおいて、「ゆかり」という存在の意味が現前化しよう。

一品宮と二品宮は決して「ゆかり」と表現されることはなかった。二品宮は一品宮のクロソンの存在であり、いほでしの中將にとっては一品宮そのものである。その二品宮を得ることで充足したいいほでしの中將にとって、「ゆかり」は「ゆかり」以上のものにならず、「ゆかり」の女性たちでは意味がなかったことを示している。この物語において「ゆかり」とは、所詮偽者なのであって、「ゆかり」と表現されることは、本物よりも格下であることの証明に他ならないのである。

しかし、結果的に偽者以外の何ものでもなかった存在でも、伏

見大君・伏見中の君・前齋院の三人の女性の関わりは大きい。いはでしのおの中將が、三者三様の扱いをしながらも「草のゆかり」とまとめてしまうのは、「ゆかり」の姫君たちの関係の近さによる。例えば、『源氏物語』の藤壺の宮と紫の上は叔母と姪であり、さらに共に住むような状況ではなかった。前齋院と伏見姉妹は叔母と姪の関係ではあるが、むしろより母親的な役割を持っており、母―姉妹という関係と捉えられる。それが「ゆかり」として捉えられるとき、巻四の和歌の贈答が示すように、「ゆかり」こそお互いの関係の始まりであり、「ゆかり」だからこそ、秘密の関係を強いるのである。大君と中將の関係を中の君や前齋院が知っていたかどうかかわからない。しかし、中の君と前齋院はそれぞれの関係を知っていた。擬似的な母―娘関係でありながら、一人の男を争うライバル同士にもある二人を描くことで、秘匿された関係にある前齋院の姿が浮き彫りにもされる。

また、完全に密通となる大君、始まりは密通でも京に迎えられる対の君として待遇される中の君、全てが秘密裏のうちに何れる前齋院、この対応のずれの中で「前齋院」という位置が何を意味するのか、「齋院」という存在が物語に登場した意味を含め、次節で考察する。

四、「前齋院」の持つ意味

なぜ物語は「齋院」を物語に登場させてきたのであろうか。

『いはいのぶ』の成立期にはすでに齋院制度は無く、齋宮制

度がかろうじて存在していたにすぎない。歴史的な影響を見るのであるならば、齋宮の登場こそ物語には自然であった。しかし、物語は齋宮ではなく齋院を選んでいる。そこには齋院の持つ物語史的イメージを利用しようとする意図が見えないだろうか。齋院に比べ齋宮は密通や恋の対象となりやすく、スキャンダルなイメージを多く持つ。物語はスキャンダルなイメージを持つ齋宮よりも、むしろ逆に不婚を通すイメージを持つ齋院を選んだのではないだろうか。

そう考えると、前齋院が中の君と対比して隠される存在となることも理解される。「草のゆかり」と述べたいはでしのおの中將は、常にあちらを思えばこちらを思い出すといったように、その愛情は不安定な状況であった。また、身分や年齢、中の君との関係など様々な障害が考えられるが、やはり、そこには前齋院の持つ「齋院」であった過去と無関係ではないだろう。第一節で述べたように、物語史における「齋院」は長く未婚であったり、結婚を拒否し出家を望む姿が多く描かれていた。この物語の前齋院も退下後も未婚を通し出家の望みを持っていた。そのような存在である前齋院自身が、自身の浮名が立つことを極端に恐れていることが秘密の恋に終わる大きな要因であろう。それは、「いとど流れ出ん末の名の憂さといひ」(巻四・五三六頁)、「入道宮(一品宮)へも、さらばとう渡したまへかし。浮き名のかくれなさこそさりととも、御心ばかりをだに、とこの山

なるとおぼされば、うれしうなん侍べき。」(巻四・五四〇頁)と、一貫して浮名が流れることを憂い、それゆえに若君も手放

す覚悟を決めていることから容易に判断できる。前掲引用部のいはでしのぶの中将の和歌と、若君を一品宮へ預けて欲しいと述べる前齋院の言葉に共通する「この山」という歌語が示すように、二人の関係はひたすら秘密の恋でなければならなかったのである。それは中の君が華々しく京に迎えられ、対の上と待遇されているのと非常に対照的である。ここには、「前齋院」―皇女との密通という概念が見え隠れしており、伏見中の君と対比させることにより、その差異が明確になっているのではないだろうか。

終わりに

「前齋院」という存在を考えたとき、第一節でも考察したように、「狭衣物語」の影響は大きい。その中でも特に一条院一品宮という前齋院の影響が強い。齋院が多く登場する『狭衣物語』には、物語固有の「齋院」に対する論理があるが、後代の物語には、「齋院」造型の一パターンとして影響されていると思われる。『いはでしのぶ』の前齋院は、この『狭衣物語』を反転したところに存在する。「なかった密通」から浮名が立ち狭衣と不幸な結婚をする一条院一品宮、「事実としての密通」から浮名が立つことをひたすらに厭い、隠し通した前齋院。同じような境遇として設定されながら（特に三十歳という年齢の持つ意味は大きいだろう。^{注18}）、前齋院を「あえかになまめかしい」姫宮とすることで、物語は齋院のイメージを塗りかえる。そして、大君や中の君といった若い姫君たちと同等に位置づけ

られながらも、その優位性を保つことは「齋院」という付加価値のゆえんかもしれない。

密通、出産、そして死。本来ならば不婚を通すべき姫宮であったからこそ、その悲劇性は必然と高まる。そして、その悲劇の皇女の死は、奇しくも中将が嘆いたように一条院皇統という悲劇の皇統の短命さの証ともなっているのである。^{注19}

注

- 1 拙稿「物語史における齋宮・齋院の変貌」『古代中世文学論考』第十三集、新典社、二〇〇五年。
- 2 物語史の中で齋院がどのように描かれるかをまとめており、前掲注一の拙稿が述べている部分と重複する箇所もある。ただし、注一の拙稿では個々の物語の引用を省き総論的にまとめているが、本稿ではもう少し丁寧に各物語を見た。
- 3 『平安時代史事典』（角川書店）「齋院」の項目より抜粋。
- 4 『源氏物語』の引用は、小学館・新編日本古典文学全集により、一部表記を私に改め、巻名と巻数及び頁数を併記した。
- 5 筆跡に関しては、そのすぐ後に「女のは、まほにも取り出でたまはず。齋院のなどは、まして取う出たまはざりけり」（『梅枝』巻③四二〇頁）とあり、特に齋院の筆跡を蛸兵部卿宮であっても公開しない様子が描かれている。
- 6 『狭衣物語』の作者は、六条齋院禊子内親王家に仕えて

いた宣言だとされている。

7 『海人の刈藻』の引用は、笠間書院・中世王朝物語全集

『海人の刈藻』（一九九五年）による。

8 『栄華物語』の引用は、小学館・新編日本古典文学全集
による。

9 『堤中納言物語』の引用は、小学館・新編日本古典文学
全集『落窪物語・堤中納言物語』による。

10 神野藤昭夫『散逸した物語世界と物語史』（若草書房、
一九九八年）

11 嵯峨帝代に母後の死去により退下している。ただし、白
河帝代に齋院に卜定された可能性も有り、二代に仕えた
齋院だったかもしれない。

12 『いはでしのぶ』の引用は、小木喬『いはでしのぶ物語
本文と研究』（笠間書院、一九七七年）により、一部表
記を私に改めた。

13 いはでしのぶの中將は、当時大将であったが、呼称によ
る混乱を避けるため、いはでしのぶの中將で統一する。

14 前齋院と中の君に関わる部分は、抄出資料である三条西
家本と冷泉家本（一部）しか残っていないため、やや不
分明な点もある。しかし、表現レベルでも十分に二人が
対比されて描かれていることが理解される。例えば、前
齋院が「おかしげ」「あへかに」「心苦しげ」「なつかし
」と形容されるのに対し、伏見中の君は、「愛敬付き」「ふ
くらふくら」などとされている。この物語の中で、女君

たちは非常に多数の表現を成されているが、「愛敬付き」という言葉の使用には問題がある。物語の女王人公である一品宮が一貫して「愛敬付き」とは表現されず、伏見姉妹や宮の君（故帥の宮の姫君）に対しては使用されることから、この物語において「愛敬付き」という言葉は、一段低い形容詞とみなすことができよう。この言葉の問題から考えると、『いはでしのぶ』では、伏見姉妹や宮の君という親王の女・女王と一品宮や前齋院という内親王を明確に区別しているといえる。

15 この辺りの冷泉家本をふまえた物語の復元については、
横溝博「冷泉家時雨亭文庫蔵『いはでしのぶ』について
―主として断簡五紙の整序に関する考察―」（『中古文学』六十二号、平成十年十一月）に拠った。

16 齋宮と齋院のイメージの差異については、前掲注一の拙稿を参照していただければ幸いである。

17 『古今和歌集』卷十三墨滅歌・一一〇八「犬上とのこの山なるなとり河いさと答へよわが名もらすな」による。
田中貴子『聖なる女』（人文書院、一九九六年）所収、
第三章「結婚しない女たち―鎌倉物語の皇女」（初出は

『年刊 日本の文学』第三集、有精堂、一九九四年）に
は、『いはでしのぶ』の前齋院について、「三十歳になる
という年齢や、さほど美しいとはいえない容貌などは、
『狭衣』の一品宮と通じるところがある。同じ皇女とは
いえ、中將がその光輝くほどの美しさに憧れる『いはで

しのぶ』の一品宮とはたいそうな違いだ。ここで問題となるのは、前齋院が三十歳だという点である。先に述べたように、三十歳は原則として女性が性的関係を退く年齢であり、皇女不婚の原則と考え合わせると、前齋院はいままで理想的な生活を送りながら、ここにきて中将に契るといふルール破りを犯したことになるのである。」と述べている。

入道の宮のもとを訪れた中将は前齋院の死を一条院内大臣を引き合いに出して嘆く、次のような場面がある。

おほかた世の中にもいかなれば一条院の御末、かくのみおはしますらん。故内大臣殿、この齋院はちごぞ残らせたまへりつるを、うち続きいとあさましきことなりなど、やすからず言ひけり。(冷泉家本 四ウ)

(かつまた・しおり 博士後期課程)